

第2章 子どもたちの揺れ動く心の背景は何か

日常的にイライラしたり、ムカついたりする気持ちを抱えている子どもたちは、どのような生活を送っているのだろうか。また、保護者は、子どもたちのこうした行動の原因をどのように考え、どのように対応しようとしているのだろうか。

この章では、本研究で実施した『子どもたちの生活実態調査』と『保護者の意識調査』の結果をもとに、子どもたちの揺れ動く心の背景を探る。

1 子どもたちの生活の特徴

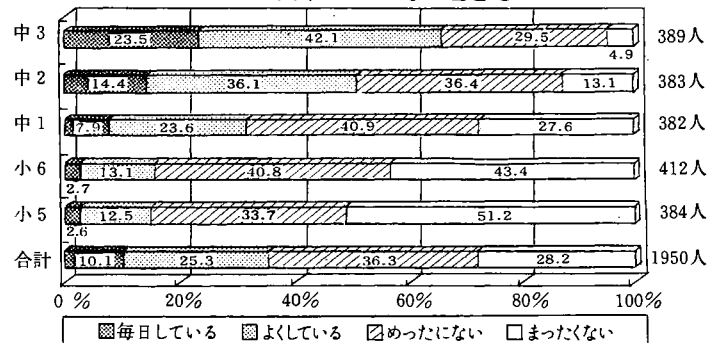
『子どもたちの生活実態調査』は、子どもたちの生活の特徴をつかみ、揺れ動く心との関連を探るために大きく次の6つで構成した。①「ふだんの日の過ごし方」（16項目）、②「もっと自由な時間があつたらしたいこと」（11項目）、③「現在の生活について感じていること」（8項目）、④「家の人とのこと」（11項目）、⑤「ホッとできる場所とその理由」、そして⑥第1章で用いたイライラ感14項目である。以下では、まず、子どもたちの生活全般に関する今日の特徴をとらえ、次に、こうした特徴とイライラ感との関係を明らかにする。

(1) 「ふだんの日の過ごし方」の項目から

ア 3割を超える子どもたちが、寝る時刻が夜中の12時を過ぎる

図1は、「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」かどうかを尋ねた結果である。「毎日している」「よくしている」を合わせると、全体で3割を超える子どもたちが夜中の12時を過ぎるまで起きている。またこの傾向は、学年が進むにつれてその割合が増してくる。とりわけ中学校の段階に入るとその傾向が顕著になっていく。中学校3年生になると、実に65.6%が、ふだんの日「寝る時刻が夜中の12時を過ぎている」ことが分かる。

図1 寝る時刻が夜中の12時を過ぎる

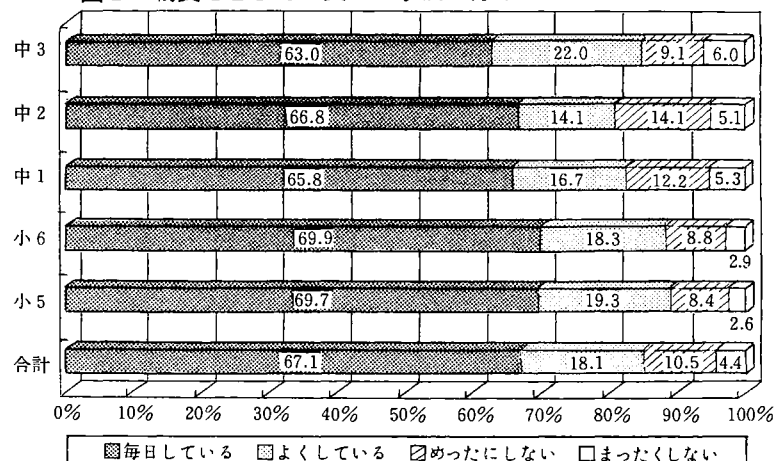


イ 2割の中学生と1割の小学生が朝食を食べないで学校へ行く

図2は、「朝食をきちんと食べてから学校へ行く」かどうかを尋ねた結果である。全体として8割を超える子どもたちは、朝食を食べてから学校へ行っている。

しかし「まったくしない」「めったにしない」を合わせると、中学校2年生で19.2%、中学校1年

図2 朝食をきちんと食べて学校へ行く



生で17.5%と2割近い子どもたちが朝食をとらずに学校へ行っている。小学生でも同様の子どもたちが6年生で11.7%、5年生で11%に及んでいる。ところで、前述の「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」項目と「朝食をきちんと食べてから学校へ行く」項目との間には、統計的な分析の結果（p.33注1）からも、強い関連があることが認められた。

図3は、「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」と回答した子どもたちの「朝食の有無」について示したものである。（「毎日している」「よくしている」を「食べる」、「まったくしない」「めったにしない」を「食べない」として処理した。）

ここからは、「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」子どもたちの約4分の1が「朝食を食べずに」学校へ行っている。小学校6年生では34.9%に達している。

以上の結果から、夜更かし傾向の子どもたちが多くいることや、そのことが翌日の朝食の有無とも大きく関係しているなどの実態が見られた。

表1は、本教育研究所が行った10年前の調査結果と平成8年の九州大学社会教育研究室の調査結果の比較である。ここからは、子どもたちのこうした特徴が、その割合を増していることが分かる。（p.33注2）

図3 「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」子どもたちの朝食の有無

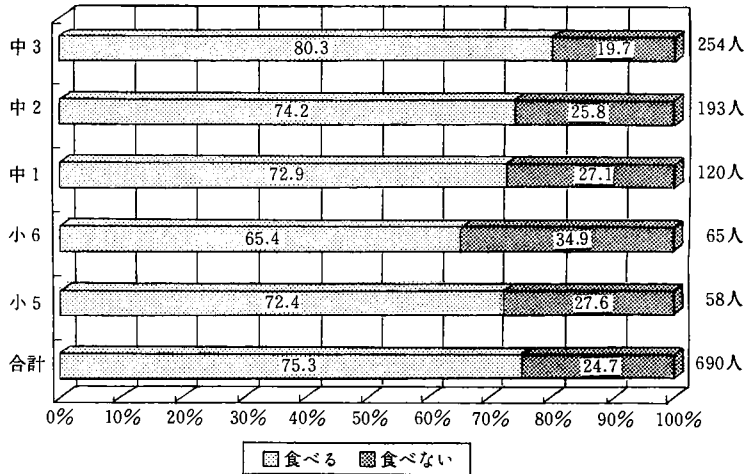
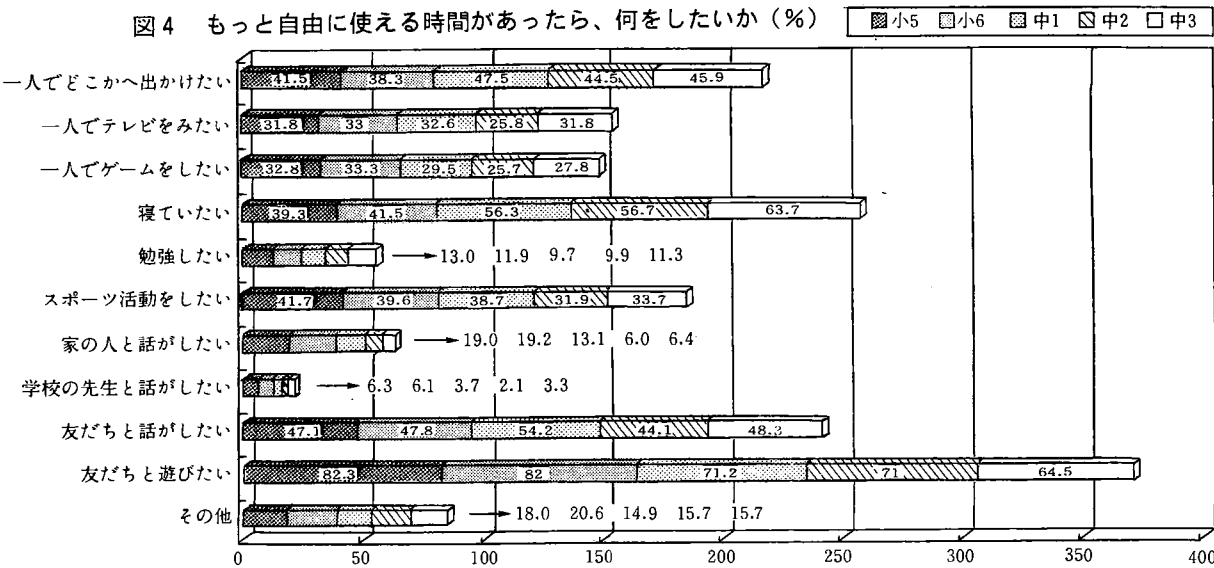


表1 子どもたちの日常生活の年代別比較

項目別	年代別	1987年 (昭和62年)	1996年 (平成8年)
起床時刻 (平均時刻)		午前7時	午前7時40分
就寝時刻 (平均時刻)		午後10時15分	午後10時40分
朝食を食べない		12.4%	19.5%

(2) 中学校2年生で「一人志向」が増える

図4は、「もっと自由に使える時間があったら、何をしたいか」を尋ねた結果である。



この図から、その全体的特徴として大きく二つの群に分けられる。一つは、「一人で〇〇したい」といった群、もう一つは「誰かと話したい、遊びたい」といった群である。

そこで、「一人でどこかへ出かけたい」「一人でテレビをみたい」「一人でゲームをしたい」「寝ていたい」を各プラス1点とし、「家の人と話がしたい」「先生と話がしたい」「友だちと話がしたい」「友だちと遊びたい」を各マイナス1点、その他を0点とし、合計点（平均点1.0点、標準偏差1.2点）を手がかりに、「一人志向型」（「平均点+標準偏差」以上）と「かかわり志向型」（「平均点-標準偏差」以下）の二つの群に分類した。

子どもの志向には、「一人でいたい」「人とかかわりたい」の両面があるが、図5では、中学校2年生段階で、「一人志向型」の割合が増加していることが特徴としてあげられる。

(3) 家の人「悩み事や相談にのってくれない」子どもたちは3人に1人

図6は、家の人「悩みや相談にのってくれる」かどうかを尋ねたものである。「よくある」「時々ある」と回答した子どもたちの割合は、全体で66.3%であった。反対に3人に1人の子どもたちが、家の人「悩み事や相談にのってくれない」と回答している。

親子のコミュニケーションの必要性が強く叫ばれ、努力しようと考えているにもかかわらず（p.33参照）、子どもの側では、3割が「悩み事や相談にのってもらっていない」と感じている。

さらに図7は、家の人「朝、『おはよう』と声をかけてくれる」かどうかを尋ねたものである。全体では、「よくある」58.8%「ときどきある」24.2%「ない」17.0%となっている。学年別では中学校2年生、3年生になると「よくある」が50%を下回っている。

子どもたちの揺れ動く心の問題をめぐる、保護者の対応や家庭の在り方が問われているが、現状は、朝の基本的なあいさつでさえ、約4割が「ときどきある」か「しない」という実態である。

図5 一人志向型とかかわり志向型の学年別割合

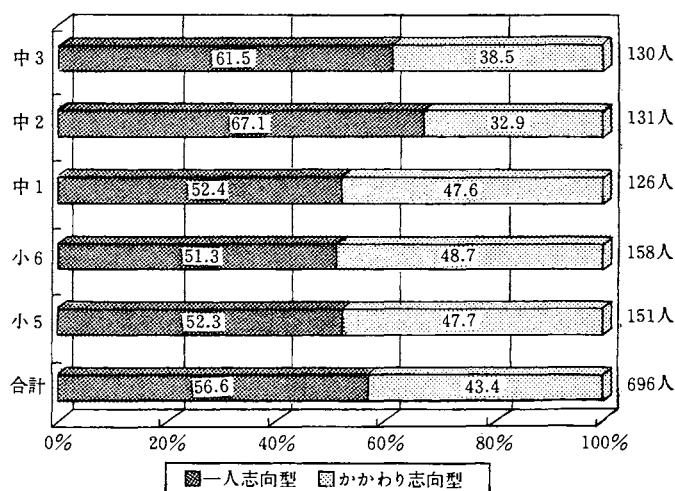


図6 家の人「悩みや相談にのってくれる」

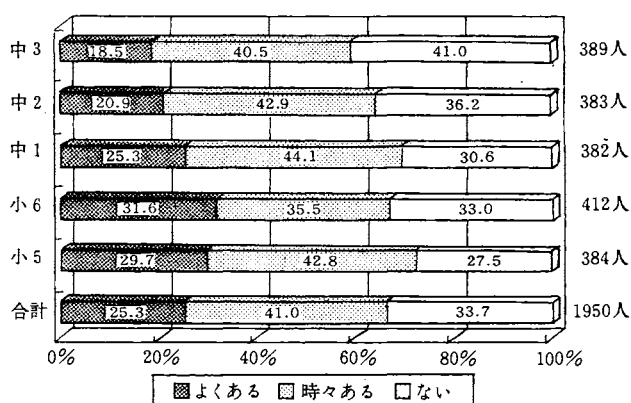
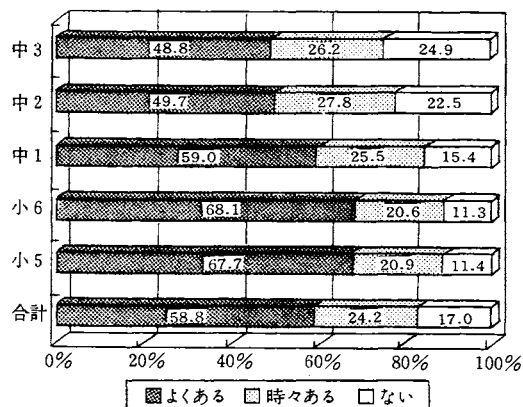


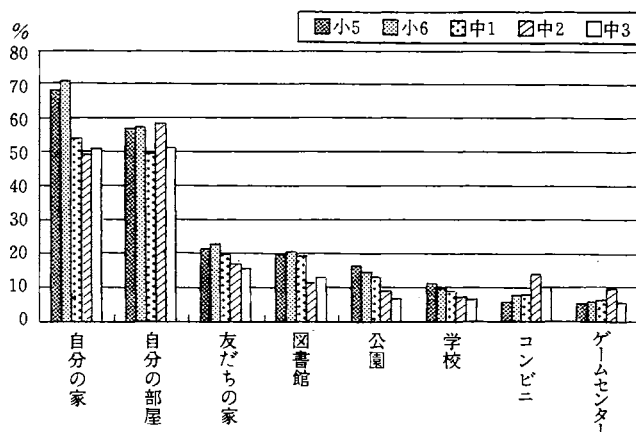
図7 朝、「おはよう」と声をかけてくれる



(4) 「一人志向型」「かかわり志向型」の違いにより、「ホッ」とできる理由は異なる

図8は、「ホッ」とできる場所について尋ねた結果である。全体としては、「自分の家」「自分の部屋」をあげる子どもたちが多い。しかし、小学生に比べると中学生で「自分の家」をあげる子どもの割合は減少し、中学校2年生では半数を割っている。中学校2年生は、他の学年に比べ、「コンビニ」「ゲームセンター」をあげる割合が多い。

図8 「ホッ」とできる場所



また、図9は「ホッ」とできる理由を尋ねたものである。「好きなことができるから」を選択した子どもたちは、6割を超えており、小学生に比べ中学生でさらに割合が増している。以下「一人になれるから」「何でも相談できる人がいるから」の順である。「何でも相談できる人がいるから」では、学年が上がるにつれてその割合が減少し、中学校3年生で2割を切っている。また「自分が役に立つから」をあげた子どもたちは、いずれの学年においても1割に満たない。

図9 「ホッ」とできる理由

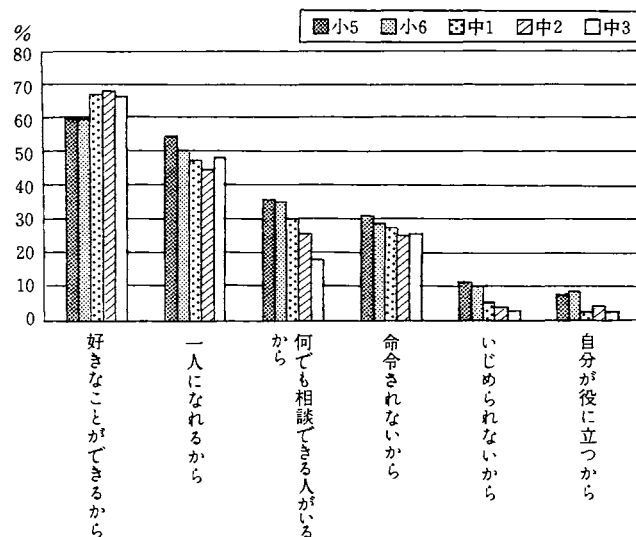
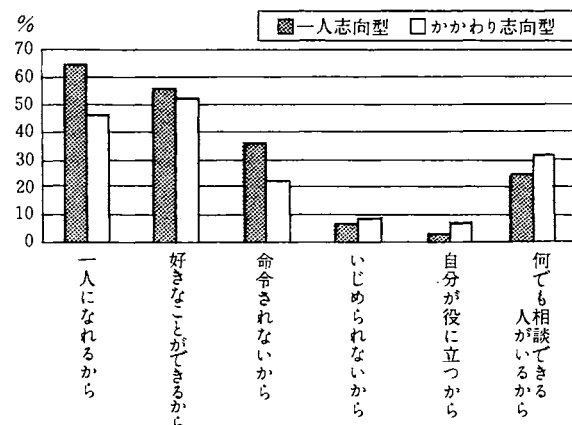


図10は、「ホッ」とできる理由について、先に述べた「一人志向型」と「かかわり志向型」のそれぞれの割合を示したものである。いずれの型でも「好きなことができるから」が多いが、「一人志向型」では、「一人になれるから」「命令されないから」「かかわり志向型」では、「何でも相談できる人がいるから」「自分が役に立つから」の割合が高くなっている。

図10 「ホッ」とできる理由～志向の違いから～



ここからは、「ホッ」とできる理由の背景に明らかな志向の違いがみられ、子どもたちの志向に応じた大人の側の多様で柔軟な対応が求められよう。

2 イライラ感の高い子どもたちの生活の特徴

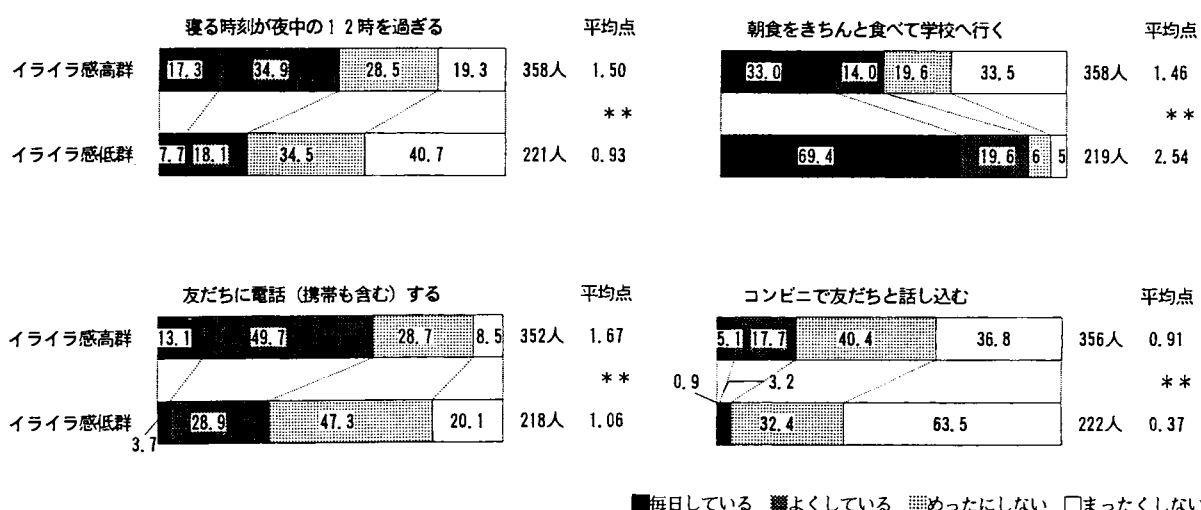
前述した子どもたちの生活の特徴を踏まえながら、ここでは、とりわけイライラ感の高い子どもたちの生活の特徴を明らかにしてみたい。具体的には、イライラ感に関する14項目を手がかりに第1章（p.10）と同様の基準で、次に示したとおりの群分けを行い検討した。

〔イライラ感の高い群（359名）イライラ感に関する14項目の合計点が16点以上の子ども
イライラ感の低い群（222名）イライラ感に関する14項目の合計点が3点以下の子ども〕

(1) イライラ感が高い子どもたちは、夜更かし傾向

まず「ふだんの日の過ごし方」において、イライラ感の高い群とイライラ感の低い群との間に、図11のとおり「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」「朝食をきちんと食べてから学校へ行く」「友だちに電話（携帯電話なども含む）をする」「コンビニで友だちと話し込む」の項目において顕著な違いが見られた。

図11 「ふだんの日の過ごし方」とイライラ感



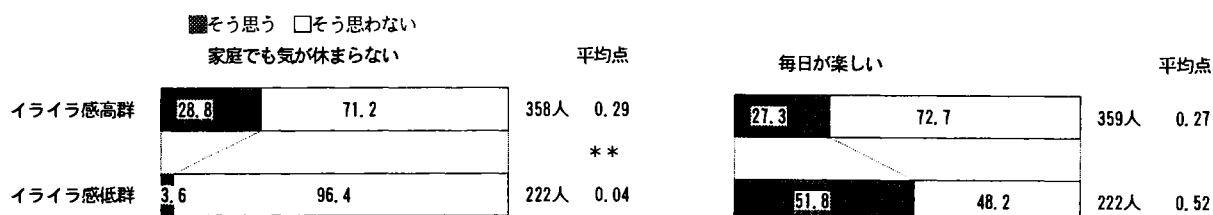
ここからは、イライラ感が高い子どもたちは、イライラ感が低い子どもたちに比べ、夜更かし傾向にある。また「朝食をきちんと食べてから学校へ行く」ことについても、イライラ感が高い子どもたちは、イライラ感が低い子どもたちに比べて、朝食をとらずに学校へ行く傾向にある。この両者は、前節でも述べたように、関連が強い項目であり、ここからは、夜更かしをせず朝食をきちんととって学校へ行くような基本的生活習慣を確立していくことが、イライラ感の低い生活を送る一つの手立てであろう。

次に「友だちに電話（携帯電話なども含む）する」「コンビニで友だちと話し込む」の項目からも、それぞれに、イライラ感が高い子どもたちは、イライラ感が低い子どもたちに比べ、友だちに電話をする頻度が多く、コンビニで友だちと話し込むことが多い。しかし、それらがイライラ感を高める要因として働いているのか、あるいはイライラ感の発散としての行動なのかは、この調査結果からだけでは示せない。今後の課題としたい。

(2) イライラ感が高い子どもたちは、家庭でも「気が休まらない」

「時間に追われて忙しい」「勉強ばかりでつまらない」「毎日が楽しい」など、現在の生活について感じていることを尋ねた項目の中で、イライラ感の高い群とイライラ感の低い群との間に最も顕著な違いが見られたのは、図12のとおり「家庭でも気が休まらない」であった。この結果からは、イライラ感が高い子どもたちは、イライラ感が低い子どもたちに比べ、「家庭でも気が休まらない」と感じていることが読みとれる。

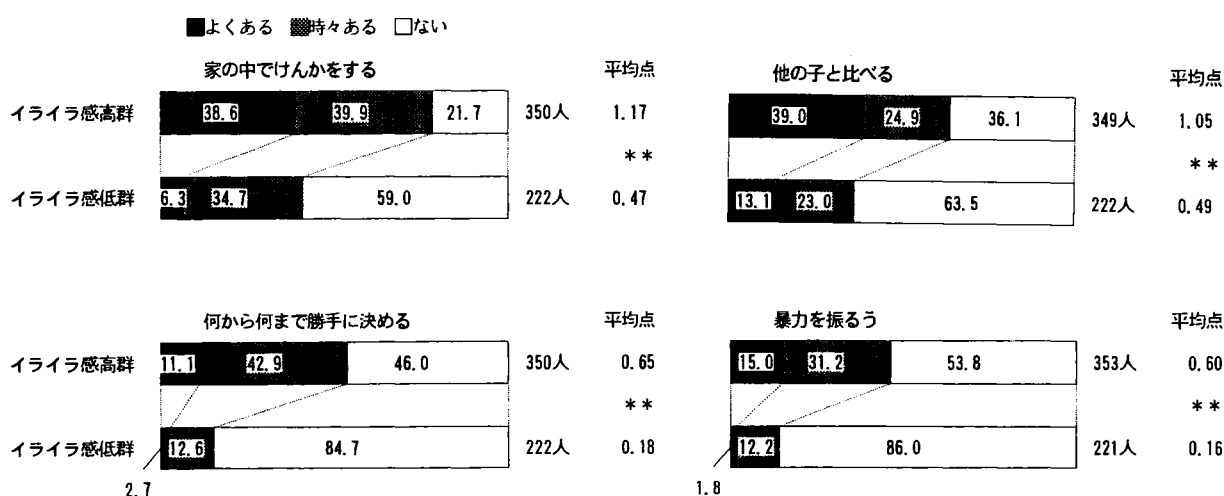
図12 「現在の生活について感じていること」とイライラ感



そこで次に「家の人とのこと」について尋ねた項目から、具体的にどのような点が、子どもたちのイライラ感とのかかわりがあるのかを検討したところ、イライラ感の高い群とイライラ感の低い群との間に顕著な違いが見られたのは、図13のとおり、保護者が「家の中でけんかをする」「暴力を振るう」「他の子と比べる」「何から何まで勝手に決める」の項目であった。

ここからは、イライラ感が高い子どもたちは、イライラ感が低い子どもたちに比べ「家のなかでけんかをよくする」「暴力を振るわれることがよくある」「他の子と比べられることがよくある」「何から何まで勝手に決められてしまうことがよくある」など、総じて、このような好ましくないと思われる関係や感情をもっていることが分かる。

図13 「家の人とのことについて」とイライラ感

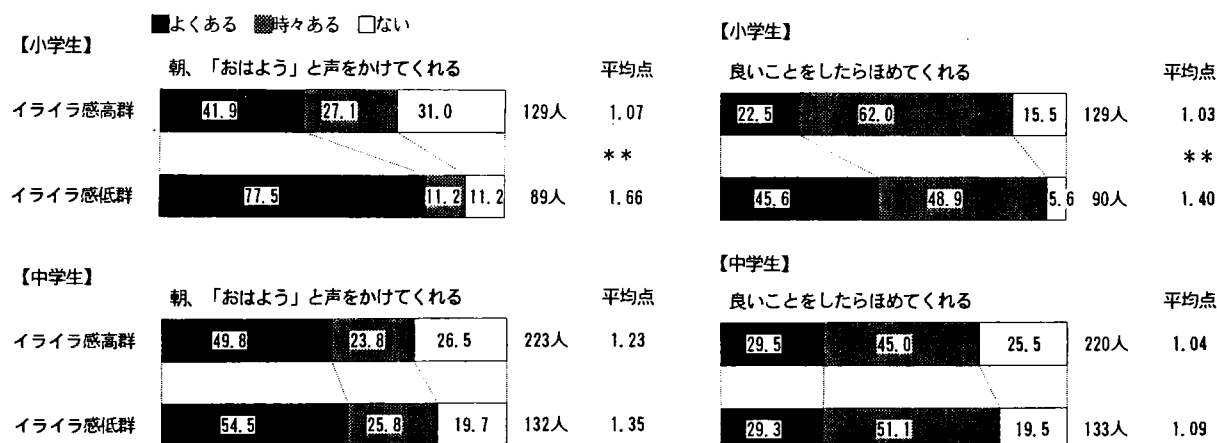


(3) イライラ感を助長しない「家の人との関係」をどう築くか

イライラ感が高い子どもたちは、イライラ感が低い子どもたちに比べ、家の人との関係が好ましくないことが分かった。それでは、その反対に「良いことをしたらほめてくれる」「朝、「おはよう」と声をかけてくれる」といった関係では、どうであろうか。

図14は、「良いことをしたらほめてくれる」「朝、「おはよう」と声をかけてくれる」につ

図14 好ましい関係とイライラ感の学年比較



いて、イライラ感の高い群とイライラ感の低い群との関係を検討したものであるが、小学生では両者の間に顕著な違いが見られたものの、中学生では大きな違いは見られなかった。このことから、小学生においては、項目に示したような好ましい関係をもつことがイライラ感を助長しない一つの方策になると考えられるが、中学生においては、小学生ほどには期待できず中学生と保護者との関係の難しさを示している。

また図15は、「朝、「おはよう」と声をかけてくれる」について、「一人志向型」と「かかわり志向型」とのイライラ感の平均点を示した結果である。ここからは、「一人志向型」の子どもに比べて「かかわり志向型」の子どもの方において、「おはよう」と声をかけてくれないことが、イライラ感を助長してしまう傾向にあることが分かる。

図15 「朝、「おはよう」と声をかけてくれる」項目のイライラ感平均

一人志向型			かかわり志向型		
ない N=66	時々ある N=89	ある N=208	ない N=54	時々ある N=66	ある N=196
10.2	8.5	9.2	14.5	12.2	11.0
**					

注1：「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」と「朝食をきちんと食べてから学校へ行く」とのクロス集計の結果を「カイ自乗検定」によって検定したところ、1%水準で有意差を得た。

注2：都立教育研究所紀要第31号「子どもの発達と生活環境についての実証的研究」昭和62年12月及び九州大学社会教育研究室『子どもの生活体験と生活環境に関する実証的研究』平成9年3月 調査対象、小学5、6年生の比較による。

3 保護者が考える子どもの行動の原因とその対応

保護者は我が子の健やかな成長を願いつつ、子育てについて様々な悩みももっている。幼稚園児から中学生までの子どもをもつ保護者は、それらの悩みをどのように解決しているのだろうか。また、子どもたちがイライラしたり、ムカついたりするなどの原因や対応を保護者はどのように考えているのだろうか。

学校と家庭が連携してこの問題の解決を目指すための方策を探ることを目的に、保護者の考えを質問紙法により調査した（以下、「本調査」とする）。

本調査に回答した保護者の内訳は、母親が回答したケースが約89%あったのに対し、父親が回答したケースは約7%であった。

(1) 子どもに関する保護者の悩みとその解決方法

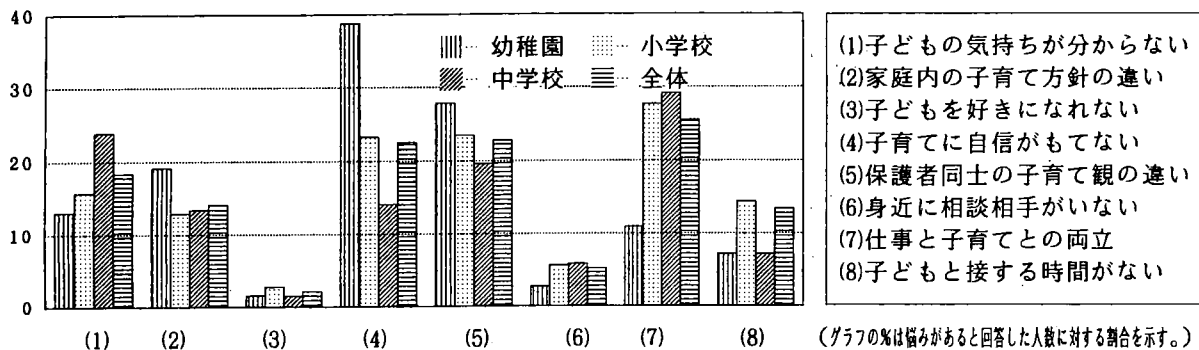
本調査では、子育てに関して、また、子どもに関して保護者がどのような悩みをもち、その悩みをどのように解決しているかを選択肢法によって尋ねた。

ア 学年が上がるにつれて子どもの気持ちをとらえきれずに悩む保護者の姿がある

《中学生の母親の記述から》

- ・子どもが苛立っているな、と感じることはあります。どうしたの、と聞けば「別に」と答えます。それ以上はどうしてよいのか、分かりません。
- ・子どもの本心がつかめないので、時間を待つしかないと思います。何故ムカつくのか子どもに聞くようにしていますが、返事がありません。

(%) 図16 子育てをするうえでの悩み（複数回答）



本調査では、保護者の52%が子育てをするうえで悩んでいることがあると答えている。

図16は、子育てをするうえでの悩みの内容を尋ねたものである。全体としては、「仕事と子育てとの両立」や「保護者同士の子育て観の違い」が多く、次いで、「子育てに自信がもてない」、「子どもの気持ちが分からない」、「子どもと接する時間がない」が多い。特に、「子どもの気持ちが分からない」、「仕事と子育てとの両立」の二つは子どもの年齢が上がるに従って高くなる傾向を示しており、子どもの成長とともに、子どもの気持ちをつかむことに悩む保護者の姿を見ることができる。

また、「身近に相談相手がいない」という悩みをあげた保護者は比較的少ないが、子どもの年齢が上がるにつれて増える傾向にある。このことは、後述する「保護者は家族や子どもと

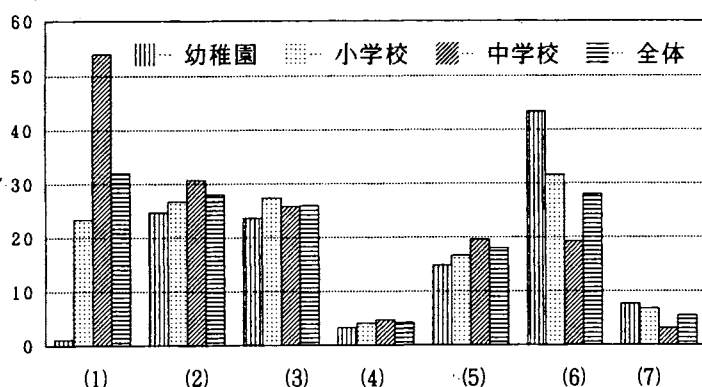
話し合って悩みを解決している」の項と併せて考えると、学年が上がるにつれて周囲の人に相談する保護者が減ることから、保護者の相談相手や相談機会の確保という課題があることを示している。

イ 子どもの友達関係や反抗的な態度に悩みをもっている保護者が多い

《幼稚園児の母親の記述から》

男子でまだ4歳なのですが、自分の気に入らないことがあると、物を投げたり、蹴飛ばしたり、その姿を見ていると将来が不安になります。子どもとの時間を十分にとり、会話をたくさんしたいと思います。

(%) 図17 子どもに関する悩み（複数回答）



- (1) 勉強をしない
- (2) 反抗的な態度をとる
- (3) テレビや雑誌の影響
- (4) 先生との関係
- (5) 基本的な生活習慣の乱れ
- (6) 友達との関係
- (7) 衝動的な行動が見られる

(グラフの%は悩みがあると回答した人数に対する割合を示す。)

本調査では、保護者の60%が子どものことで悩んでいることがあると答えている。

図17は、子どもに関しての悩みを複数選択で尋ねたものである。悩みの内容は勉強に関するものを除けば、子どもの学齢にかかわらず、「友達との関係」「反抗的な態度」「テレビや雑誌の影響」等が多くあげられた。小学校について10年前に実施した調査と比較すると、「勉強をしない」「反抗的な態度をとる」「友達との関係」などが上位にあることは同じであるが、「勉強をしない」が減少の傾向を示すのに対し、「友達との関係」「反抗的な態度をとる」は増加していることが特徴である。(注)

また、全体の5.5%の保護者が、子どもに「衝動的な行動が見られる」ことをあげている。

ウ 保護者は家族や子どもと話し合って悩みを解決している

《小学校6年生の母親の記述から》

何に対してイライラするのかを聞き役に回って、子どもの話をじっくりと聞きます。そして、イライラの原因が解決できるように話し合います。時間をかけてじっくり話しているうちに、今まで抑えていた感情が涙になって表れたこともありました。そうになると、胸につかえていたものが一気にとれたような表情になります。

(注) 東京都立教育研究所社会教育研究室『家庭教育の実態と親の意識についての基礎研究』

(平成元年3月) 勉強をしない:39.8%、反抗的な態度をとる:19.8%、友達との関係15.1%

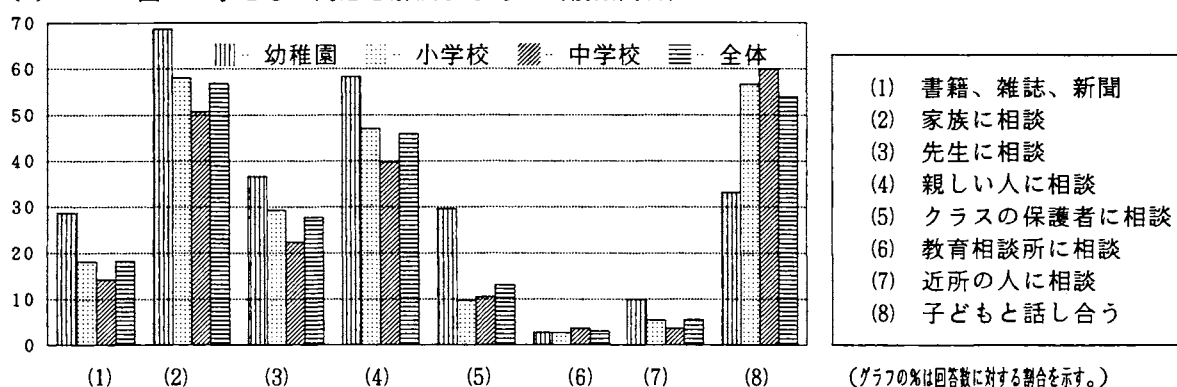
既に述べたとおり、60%の保護者が子どものことで悩みがあると答えている。また、子どもの学齢が上がるに従って、子どものことで悩みをもつ保護者は増えている。

図18は、保護者が子どもに関する悩みを解決するときの方法を尋ねたものであるが、「家族に相談する」「子どもと話し合う」が多く、次いで「親しい人に相談する」の順である。先に述べたように、「家族に相談」「親しい人に相談」「先生に相談」という解決方法は学齢が上がるに従って回答の割合が減っている。身近に相談できる人が減ってくるということは、解決を図る上での隘路となる。学校教育相談や地域の教育相談所等、保護者を支援する多様な機関との連携が求められる。

一方、「子どもと話し合う」という解決方法のみが、学齢が上がるに従って漸増している。このことは、「子どもと話し合う」という解決方法が、これまでも効果的だったことを示しているといえる。この設問で「何が最も効果的な解決方法だったか（一つ選択）」を尋ねたところ、「子どもと話し合ったこと」が38%で最も多かったことから、このことが裏付けられる。

また、「先生に相談したこと」を最も効果的であると回答したのは9%であった。いずれの回答結果からも、子どもたちの揺れ動く心への対応を含んだ様々な問題の解決に当たって、教育相談機関等も含めて、人のかかわりが大切であることがうかがえる。

図18 子どもの問題を解決する方法（複数回答）



(2) 保護者が考える子どもたちの揺れ動く心の背景は何か

本調査では、子どもたちの揺れ動く心の原因や対応の在り方について、保護者がどのようにとらえているのか、記述形式によって尋ねた。

ア 子どもたちの揺れ動く心への対処に戸惑っている保護者

《中学生の母親の記述から》

自分の弱いところや、自分の思いどおりにいかないと、「ムカつく」という言葉が口癖のように出てくるような気がする。何に「ムカつく」のか本人に聞いてはいるが、根本的にはどうしたらよいか分からない状態です。

上記の母親と同様に、多くの保護者が子どもたちの揺れ動く心への対処に戸惑っている様子を述べている。また、本調査に答えた保護者2122名の内の82%が、この設問に対しそれぞれの考え

を記述している。これらのことから、子どもたちの揺れ動く心の問題に保護者は戸惑いながらも、真剣に対処しようとしていることがうかがえる。

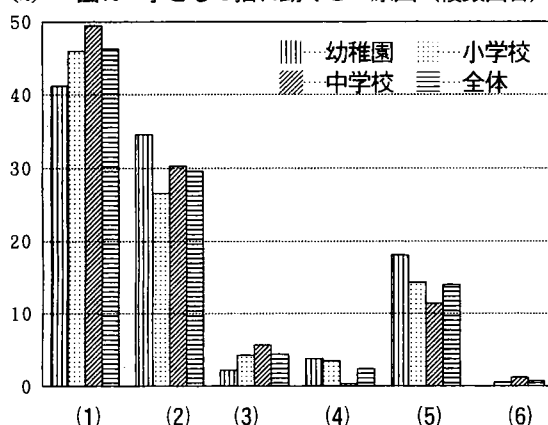
イ 保護者は、その原因の多くが自分たちの子育てや生活の在り方にあるととらえている

図19は、「イライラする、ムカつく」という子どもの揺れ動く心の原因を、保護者の自由記述から六つのカテゴリーに分類したものである。

保護者は、その原因を忍耐力の不足や自己中心的な子どもの性格、忙しい生活、ストレスの多い生活等、「子ども自身の性格や生活に起因する」と考えていることが分かる。次いで過保護や甘やかし、食事の問題やしつけ等、「家庭や大人に問題や責任がある」があげられ、マスコミやテレビ・雑誌の影響、物質的な豊かさなど、「社会に問題や責任がある」との回答が続いている。

「学校や教師に問題や責任がある」「地域の在り方に問題や責任がある」という回答はそれほど多くない。保護者は、子どもの行動の原因を学校や地域社会の在り方に求めるよりも、自分たちの子育ての結果や生活の在り方にあると、自分自身に厳しい見方をしていると言える。しかし、第1章で述べた子どものイライラ感の高まる原因が、友達関係に多い事実を、学校や教師は受け止める必要がある。

(%) 図19 子どもの揺れ動く心の原因（複数回答）



- (1) 子供自身の性格や生活に起因する
- (2) 家庭や大人に問題や責任がある
- (3) 学校や教師に問題や責任がある
- (4) 地域の在り方に問題や責任がある
- (5) 社会に問題や責任がある
- (6) 原因は複雑で分からない

(グラフの%は回答数に対する割合を示す。)

ウ 保護者自身が子どもへのかかわり方を変えることによって対応しようとしている

《中学生の父親の記述から》

- ・基本的には幼児期からのしつけと生活の楽しさのバランスが必要。厳しさと生活の安心感を与える環境、特に家庭の役割が重要だ。
- ・私たちも含め今の大人たちにも問題があると思っています。子どもにどうこう言う以前に、今の大人一人一人が、あるいは、社会がもっと道徳性を身に付けるべきだと考えます。
- ・子どもと話をする機会を多くもち、小さなことくらいで「ムカつく」ことのないようにしたい。
- ・子どもたちに夢がなく、何を目標にしたらよいのか分からないのではないかな。ボランティア活動を通して、人に対する優しさや思いやりの気持ちを養っていききたい。

図20は、「イライラする、ムカつく」という子どもの揺れ動く心への対応を、保護者の自由記述から六つのカテゴリーに分類したものである。

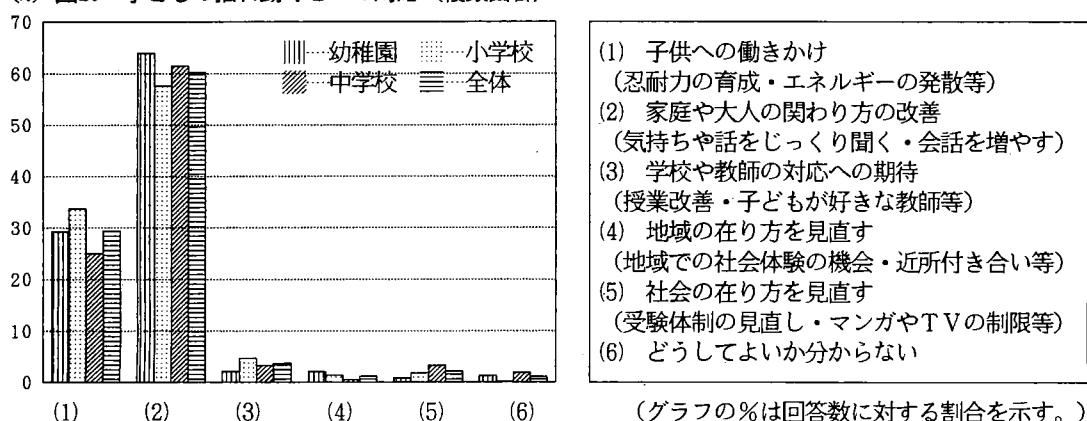
子どもの揺れ動く心の原因として、子ども自身の性格や子どもを取り巻く生活も含めて家庭や大人の責任が多くあげられていたが、対応としても、「気持ちや話をじっくり聞く」「親子の会話や触れ合いの機会を増やす」などして、「家庭や大人のかかわり方を改善する」という回答が他に比べて断然多い。

次いで、忍耐力の育成、エネルギーの発散やストレスの解消等の「子どもへの働きかけ」が多くあげられている。これらに比べて、「学校や教師の対応へ期待」や「地域の在り方を見直す」「社会の在り方を見直す」等は少ない。

ここからは、子どもの揺れ動く心に対して、保護者自身が子どもへのかかわり方を変えることによって対応しようとしている姿勢をうかがうことができる。

ただし、これらの対応が効果的なものとなるには、2節の「イライラ感の高い子どもたちの生活の特徴」の項でも述べたように、保護者の接し方や会話の内容等を吟味していかなければならない。「勉強を見てくれる」「一緒に遊んでくれる」「朝“おはよう”と声をかけてくれる」「悩みごとを聞いたり相談にのってくれる」等の対応が、小学生ではイライラ感を高めない一つの方策として効果が期待できる。中学生は、小学生ほどこのような保護者の対応を期待していないが、保護者が子どもへのかかわり方に配慮していく際に、子どもの発達段階や気持ちに寄り添った接し方が大切である。

(%) 図20 子どもの揺れ動く心への対応（複数回答）



4 まとめ

(1) 子どもたちの生活実態調査からみえてきた特徴

ア 「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」子どもが全体の3割、「朝食を食べないで学校に行く」子どもたちが小学生で1割、中学生で2割に及んでいる。イライラ感の高い子どもたちは、低い子どもたちに比べて、これらの傾向が強い。

イ 子どもたちの揺れ動く心への対応策として、保護者の6割は「気持ちや話をじっくり

り聞く」「親子の会話や触れ合いの機会を増やす」をあげているのに対し、「悩み事や相談にのってくれない」と回答した子どもたちは全体の3割に及んでいる。

ウ イライラ感の低い子どもに比べ、高い子どもの方が「家庭でも気が休まらない」と強く感じており、具体的に、保護者が「家の中でけんかをする」「他の子と比べる」「何から何まで勝手に決める」「暴力を振るう」などがある場合、子どもたちにイライラ感の高い傾向が見られる。

エ 家庭において、「朝、おはようと声をかける」「良いことをしたら褒めてくれる」といった関係をもつことは、小学校段階では、イライラ感を助長しない方策として有効であるが、中学校段階においては、小学校段階ほどの効果は期待できない。

オ 「ホッ」とできる理由について、「好きなことができるから」と回答した子どもたちは、全体の6割に及んでいる。また、「一人志向型」の子どもたちは、「命令されないから」といった理由をあげる傾向が高く、「かかわり志向型」の子どもたちでは、「何でも相談できる人がいるから」をあげる傾向が見られる。

(2) 保護者調査からみた特徴

ア 10年前の調査と比較して、子どもの「友達との関係」のことで悩む保護者が増えている。

イ 学年が上がるにつれて、保護者の子育ての悩みは深刻になりがちであるが、身近な相談相手が少なくなる傾向がある。

ウ 保護者は子どもたちの揺れ動く心の問題を、学校や社会の在り方に原因があると考えよりも、保護者自身の子どもの接し方やかかわり方を変えることで対応しようと努力している。しかしながら、その対応については、学年が上がるにつれて、子どもの気持ちを正しくとらえきれず、悩む保護者の姿が見えてくる。

<両調査から考えられる学校と家庭・地域社会との連携>

ア 基本的な生活習慣を確立するには、学校だけ、家庭だけで実現するものではなく、地域社会の協力を得て、三者が一体となって行っていく必要がある。学校は、日常的に三者の情報交換の機会をつくるなど、子どもたちの生活のありようを家庭・地域社会に積極的に提起する必要がある。

イ 学年が上がるにつれて相談相手や機会が狭まる中で、接し方を一律にするのではなく、相談機関や地域の教育機関と連携するなど、学校が保護者の悩みを受け止める多様な方法が求められている。学校や教師が保護者の悩みを受け止め、解決に向け支援できる力量が求められている。

ウ 子どもたちが自信をもち、自らの存在を確認することができるよう「心の居場所」を地域に多様に作り出すことが求められている。学校が地域社会に働きかけ、多様な人々との出会いの中で、子どもたちが学校で学んだことや自信をつけたことを実践していくことができるような場を生み出していく必要がある。